



大阪府遊技業協同組合
「車上狙い・ひったくり撲滅キャンペーン」事業



大阪府遊技業協同組合
善意の箱・社会貢献委員会
委員長
平川順基さん



大阪府遊技業協同組合
副理事長
田中孝明さん

選考理由

社会貢献活動審査委員会
委員長代行
脇田直枝氏



大阪のひったくり件数が35年ぶりに全国ワースト1を返上した。街頭犯罪件数においても11年ぶりのワースト1返上である。その背景には、長年にわたって「車上狙い・ひったくり防止カバー」を寄贈という実績があり、20年度からは従業員が外に出て、大阪府下64警察署、大阪府防犯協会の協力を得て12会場で被害防止を訴えた成果であろう。官・民・他団体とのスクラムがマスコミの耳目を引きつけ、社会的運動となった。

街頭犯罪を防いで
安心・安全な地域づくりに貢献

ひったくりワースト1の汚名を35年ぶりに返上
ひったくり、路上強盗、車上狙い、部品狙い、自動車盗難、自転車盗難、オートバイ盗難、自販機狙いを総称して街頭犯罪という。都道府県別の街頭犯罪数で、昨年、11年ぶりに全国ワースト1を返上したのが大阪府である(ワースト1は東京都)。また、ひったくり件数でも、大阪府は35年ぶりにワースト1を返上した(ワースト1は千葉県)。とくに、ひったくりに関しては、前年比で32.6%も減ったことでワースト1を免れたが、そこには行政や警察はもとより、府民や民間業者などが一体となった熱心な取り組みがあった。その一翼を担ったのが、大阪府遊技業協同組合(以下、大遊協)である。

「車上狙い・ひったくり撲滅キャンペーン事業のそもその発端は、2006年に大阪府防犯協会連合会から、自転車の前かごに取り付けるひったくり防止カバーの寄贈を依頼されたことでした。それを2年続けましたが、08年からは、せっかくやるのなら全国地域安全運動週間などと連動させ、街頭に出て直接、府民に被害防止を訴えようということでキャンペーン隊を組織して、府内の警察署などと協力しながらキャンペーンを展開することになりました」

そう話すのは、大遊協の田中孝明副理事長。昨年は、府下12ヵ所でキャンペーンを実施した。キャンペーン隊長に任命されたタレントを筆頭に(昨年は板東英二さん、タージンさん)、所轄の警察署や防犯協会関係者、大遊協のスタッフが繁華街や公共施設前などに設けられたキャンペーン会場に出向き、ひったくり防止を訴えとともに、大遊協が用意したひったくり防止カバーの取り付け方を説明し、会場に詰めかけた市民にカバーを配布した。また、同時にキャンペーン用チラシとセルフ商品のクッキーの配布も行った。カバーは63cm四方で、ポリエステル製の丈夫なもの。自転車の前かごに取り付けることで、かごの中身が見えないうえ、外から手が入らないような工夫がされているので、ひったくり防止に、ほぼ100%の効果を発揮するという。



ひったくり防止カバーを配布する大遊協のスタッフ



阪神電車野田駅前広場で行った配布の様



ひったくり防止カバー配布活動をタ刊フジが大々的に報道



実際に配布されたひったくり防止カバー。自転車に取り付けるとカゴの中身がわからないうえ、外から手が入らないよう工夫されている

善意の箱・社会貢献委員会を中心に継続展開

大遊協では、昨年、4万2,000枚のひったくり防止カバーを作製。このカバーをつけた自転車が街中を走っているのを見かける機会も増えているという。具体的な数字や根拠をあげて、このカバーの効果を検証することは難しいが、大阪府のひったくりや街頭犯罪件数減少に役立っていることは間違いなさだろう。

このキャンペーン活動の実際の担い手である大遊協「善意の箱・社会貢献委員会」の平川順基委員長も、「確かに効果を数量的に測ることは困難ですが、活動を通じて、防犯に対する意識づけを常時、持ってもらうことが一番大切なこと。そのためには、地道な取り組みですが、こうした活動を継続して行うことが大事だと考えています。また、おそらく効果を実感されたからだと思いますが、一度、キャンペーンを行った地域で、今年もまたやってください

と熱心な要望を寄せてくださる場所もあります」と話す。

キャンペーンの実施にあたっては、実施場所の所轄の警察署や防犯協会をはじめとする関係機関との調整、さらに実施エリアの支部組合との調整が最も苦勞する点だとか。さらにキャンペーン効果を高めるために、事前に実施エリアにポスターを掲示したり、ホールが作成する新聞折り込みチラシなどに刷り込んだりして告知をするともに、マスコミなどへの周知アナウンス、新聞記事広告の掲載などを行っている。

「支部組合を含め、この活動が確実に地域に浸透しつつあることは評価されているのではないかと、平川さん。「少なくとも全61支部が一巡するまでは継続する予定です。その間に、できればワースト5から脱却できればいいですね」と、田中さん。車上狙いともども、今後、少しでも発生件数が減ることを期待したい。